

「地域・在宅看護論」の授業をつくるにあたっての考え方 ～河原加代子先生に聞く～



『系統看護学講座 在宅看護論』から筆頭著者を務めていただいている東京都立大学大学院・河原加代子先生にお話をうかがいました。

●「地域・在宅看護論」の授業づくりのポイント

——今回のカリキュラム改正で、「地域・在宅看護論」は単位数が増えたほか、「基礎看護学」の次に位置づけられて低学年からの教育が推奨されるかたちになりました。これに合わせて1年次から「地域・在宅看護論」の授業を開始する大学・専門学校(以下、学校)が増えているようです。「地域・在宅看護論」の授業づくりをどのように考えればよいか教えてください。

河原：「地域・在宅看護論」については、学校の実情に応じて先生方がさまざまな工夫をされて授業をつくられているかと思います。1年の前期から「基礎看護学」と並行するかたちで授業を開始する学校がある一方、従来の「在宅看護論」を拡充するかたちで2～3年次に授業を置く学校もあるようです。いずれのかたちにせよ、今回新たに加わった「地域」をどのように教えるかがカギになるでしょう。学生の多くは「看護は病院で行うもの」というイメージをもって入学してきますし、地域で看護が行われている場面を見たことがない学生も多いようです。まずは学生に地域のイメージをもってもらうことが重要になると考えます。

——学生に地域のイメージをもってもらうにはどのようにすればよいでしょうか。

河原：今回のカリキュラム改正のもととなった『看護基礎教育検討会報告書』(厚生労働省, 2019年)は、「地域・在宅看護論」の改正目的を「療養者を含めた地域で暮らす人々を対象と捉える趣旨を明確するため」としています。そこで、まず学生には「地域とは人々の暮らしの集合体なんだ」というイメージをもってもらうことが重要だと考えます。地域にはほかにもさまざまな構成要素がありますが、まずは「人々の暮らし」から入って次第に理解を深めてもらうとい

う構造がよいでしょう。

地域の教育において、私が重視しているポイントは、①フィールドワークを活用して身体感覚で実際の地域を体感してもらうこと、②学生に身近なテーマや話題を盛り込んで関心を引き寄せること、③学生どうしの意見交換やプレゼンテーションの機会を設け、学生が自分なりの言葉で説明できるようにすること、の3点です。今回のカリキュラムの改正で3年課程は2単位増、2年課程は1単位増となり、「地域・在宅看護論」の枠内で設置する科目数を増やす学校が多いと思いますが、それぞれの科目でフィールドワークや意見交換のグループワーク、発表などを積極的に盛り込んでいただくとよいかと考えます。

——学生に「人々の暮らし」をどのように教えればよいでしょうか。

河原：「暮らし」は平凡なテーマで、若いうちはなかなか関心が向きにくいと思います。また、暮らしは漠然とした、とらえにくいものです。「暮らしとはどのようなものと思うか」「あなたはどのように暮らしているか」「あなたが暮らしのなかで困っていることはなにか」などと発問して学生が自分ごととして考える機会を提供するなど、関心をもってもらうように工夫する必要があります。とくに「困りごと」に着目すると、身近な問題として暮らしを考えやすくなると思います。

学生は最初、自分や家族の暮らししか知らないことが多いですが、人々の暮らしの個別性に気がつき、暮らしにおける看護、暮らしの個別性に応じた看護の大切さに気がつくと、その後、成人看護学、母性看護学、小児看護学などのさまざまな看護を学ぶなかで、学習の広がりや深まりが違ってきます。患者の背景や退院後の生活を考え、創意工夫をするようになるのです。

——学生に暮らしの個別性や多様性を理解してもらうためには、どのような方法があるでしょうか。

河原：学生に最も身近な「家族の暮らし」を入口にするとよいと思います。たとえば、調べ学習や発表なども含むグループワークを行って、多様な価値観や考えに触れる機会を設けるのも1つの方法でしょう。ただし、学生の家族がさまざまな問題をかかえている可能性があり、直接的に取り扱うことがむずかしいため、事例などを使っていくとよいと思います。『系統看護学講座 地域・在宅看護論[1]地域・在宅看護の基盤』（以下、『地域・在宅看護論1』）では、序章「地域のなかでの暮らしと健康・看護」のなかで、看護学生の看子さんとその家族である斎田家の暮らしが事例として紹介されています。多世代、家族の歴史、介護、仕事、病気などのさまざまなテーマが盛り込まれていますから、この事例を使っていただくのもよいでしょう。斎田家と自分の家族の暮らしを比較して、共通点や違いに関心をもってくれるのではないのでしょうか。

——フィールドワークとはどのようなものですか。

河原：学生に自分の住んでいる地域、あるいは学校周辺を実際に歩いて観察してもらうものです。「地域・在宅看護論」の最初の科目では、事前学習として各自が自分の住んでいる地域を15～20分ほど歩いて観察するフィールドワーク、学習が進んだ段階の科目でしたら、学校の近くの商店街や住宅街などをグループに分かれて観察・調査を行う地区踏査の要素を含んだフィールドワークを取り入れるとよいでしょう。いずれのフィールドワークでも調べ学習の要素を加えてレポートをまとめてもらい、授業のなかでグループワークや発表の時間を設けて共有してもらうとさらに学習が深まります。

現在は、動画や仮想現実(VR)などの便利な教材も多くありますが、視覚だけではない全身のすべての感覚(身体感覚)で感じる事が重要と考えています。その場の空気や物に触れ、においをかぎ、人々の声を聞き、階段や坂を上ると、座学だけでは伝わらないさまざまなことが分かるでしょう。地域や暮らしは、身体感覚と合わせて学習することが学生の理解を深めるポイントだと、私は考えています。

——1・2年次で行う初期段階の授業では、どのような目標を設定すればよいでしょうか。

河原：「地域・在宅看護論」では、地域や暮らしについて学ぶ初期段階の授業が特に重要になると思います。1～2年次の間に2単位(30時間)ほどの科目を設定する学校が多いと思いますが、学生が自分自身の言葉で「暮らしとはなにか」「暮らしのなかの看護とはどのようなものか」が説明できることが大切な1つのゴールと考えています。どれも正解がない問題ですから、自分なりの説明でよいでしょう。説明できるほど理解が進めば、その後のさまざまな看護の学習でも、病院中心ではなく地域の視点も盛り込んだ看護を考えられるようになると思います。

自分なりに説明できるようになるためには、授業のなかで意見交換や発表の機会を何度も設けることが大切です。15～20分程度の短時間のグループワーク、調べ学習や発表を含む1コマ程度を使った大規模のグループワークなどをとところどころに取り入れるとよいでしょう。『地域・在宅看護論1』にはいくつかの章末に演習が設けられています。すべての内容を演習として活用する方法もありますし、その一部分を学生への発問やグループワークの課題として活用する方法もあると思います。

●『地域・在宅看護論1』を使った授業展開

——『地域・在宅看護論1』を使って、どのような授業展開を考えられますか。

河原：『系統看護学講座 地域・在宅看護論[2] 地域・在宅看護の実践』(以下、『地域・在宅看護論2』)よりも、この本の使い方のほうが難しいと思います。これまで述べてきたように、学

生には地域や暮らし、地域と看護が結びつくイメージがありませんし、保健師養成課程のない学校でははじめての試みになるからです。1～2年次の2単位ほどの科目で『地域・在宅看護論1』を使う学校が多いと思います。「地域・在宅看護論概論1・2」「暮らしと健康」「暮らしと看護」など、名前はさまざまでしょう。授業では、最初から順に教えていく方法もありますが、序章を授業の中盤で使う方法もよいと考えています。

——序章を中盤で使うのはなぜでしょうか。また、どのようなかたちで使いますか。

河原：序章は「暮らし」のイメージをもたせるのに有用な教材です。先に「暮らしとはなにか」「地域とはなにか」「地域にはどのような人々が住むのか」などをひと通り学習してからのぞんだほうが、より深い学びができるかもしれません。具体的には、1章A節、2章A節、3章A節、B節①・②、4章A・B・C・D節、5章A・B節あたりまで授業を進めたあと、序章の斎田さん一家を題材にしたグループワークをはさむとよいと思います(図1)。授業の最初は1章A節ではなく、3章A節の対象論から入る方法もよいでしょう。これらの授業で基本的な知識を得たあと、事例をもとに家族について考え、話し合うという構成です。また、1年次の前期からはじめた場合、学生の緊張がとけて、学生どうしの人間関係ができるのに2～3か月は

序章 地域のなかでの暮らしと健康・看護

- A 働くこと・学ぶことと暮らし
- B 高齢者のいる暮らし
- C 出産・育児と暮らし

第1章 人々の暮らしと地域・在宅看護

- A 人々の暮らしの理解
- B 地域・在宅看護の役割

第2章 暮らしの基盤としての地域の理解

- A 暮らしと地域
- B 暮らしと地域を理解するための考え方
- C 地域包括ケアシステムと地域共生社会

第3章 地域・在宅看護の対象

- A 地域・在宅看護の対象者
- B 家族の理解
 - ① わが国における家族の現状
 - ② わが国における家族とその変遷
 - ③ 地域・在宅看護の対象としての家族
- C 地域に暮らす対象者の理解と看護

第4章 地域における暮らしを支える看護

- A 暮らしを支える地域・在宅看護
- B 暮らしの環境を整える看護
- C 広がる看護の対象と提供方法
- D 地域における家族への看護
- E 地域におけるライフステージに応じた看護
- F 地域での暮らしにおけるリスクの理解
- G 地域での暮らしにおける災害対策

第5章 地域・在宅看護実践の場と連携

- A さまざまな場、さまざまな職種で支える地域での暮らし
- B おもな地域・在宅看護実践の場
- C 地域・在宅看護における多職種連携

第6章 地域・在宅看護にかかわる制度とその活用

- A 介護保険・医療保険制度
- B 地域・在宅看護にかかわる医療提供体制
- C 訪問看護の制度
- D 地域保健にかかわる法制度
- E 高齢者に関する法制度
- F 障害者・難病に関する法制度
- G 公費負担医療に関する法制度
- H 権利保障に関連する制度

図1 『地域・在宅看護論1』目次

かかります。話し合った結果をまとめて発表するような大規模なグループワークは中盤以降の
ほうが有効に機能しやすいでしょう。

——序章を使うグループワークはどのように行いますか。

河原：序章は、看護学生が主人公の斎田家という家族についての物語です。「働くこと・学ぶ
ことと暮らし」「高齢者のいる暮らし」「出産・育児と暮らし」という3つのテーマのエピソード
が掲載され、読者の思考をうながす「考えてみよう」という発問が多くつけられています(図
2)。学生には、事前学習で序章を読んでもらい、いくつか指定した「考えてみよう」について自
分なりの考えをまとめてもらいます。それぞれ自分の家族の状況によって価値観や考え方の違
いが出てくるでしょう。1コマほど使って、それぞれの考えをグループで話し合い、グループ
ごとに発表してもらいます。多くの学生はそれまで家族や暮らしについて誰かと話し合う機会
や経験が少なかったせいか、自分の家族やその暮らしが一般的と考えがちですが、話し合いに
よって自分と違う考え方や価値観に触れ、家族や暮らしの多様性に気がつきます。

● 暮らしのなかでの介護への準備

近ごろ母は、父と相談して、介護がらくにできるよう自宅を建てかえた。
おかげで、祖母はいま、要介護5、車椅子で生活しているが、生活動線にス
トレスなく暮らしている。祖母は、入院や施設入所は「いやだわねえ」とい
つも言っていたし、「経管栄養をしてまで生きていたくない」とも言ってい
た。その希望をかなえるために、不自由なく過ごすことのできる住居環境を
整えたのだ。

「介護ってたいへんでしょう」と知り合いには言われるが、自分としては
さほどたいへんとは思っていない。いつも祖母に笑顔をもらっていて、これ
くらいかわいらしく年をとりたいなと思うくらい、やさしい気持ちで祖母を
見ることができている。

考えてみよう!

介護がらくにできる住環境とはどのようなものか考えてみよう。

住環境以外にも、介護を予見して先に準備しておくことはあるだろうか。



看子の視点

- 祖母が元気なときから、年をとったらどのような暮らしをしたいと考えているのかを繰り返し話し合い、家族と一緒に考えてこられたから、いまの生活ができているのかもしれない。
- もし介護をしやすい今の自宅でなかったら、祖母も私たちも、もっとたいへんだったと思う。

図2 『地域・在宅看護論1』序章の一部

——フィールドワークはどのあたりに盛り込むとよいでしょうか。

河原：「自分の暮らしている地域はどんなところか観察してみましょう」などを課題にして、2
章A節「暮らしと地域」の授業の際に挟むとよいでしょう。事前学習として、自分の住んでい

る地域にどのようなものがあり、どのような人々の暮らしがあるかを、15～20分くらい実際に歩きながら観察してもらいます。地域の実情に応じて、自動車なども利用してもらうとよいでしょう。課題を出してから1週間ほど時間をとり、調べ学習も加えた簡単なレポートをまとめもらいます。その後、授業のなかで短時間のグループワークの時間を設けて体験を共有してもらうというかたちです。

——序章を使ったグループワークのあとは、どのような展開になるでしょうか。

河原：地域や暮らしについて、少しイメージがもてたという段階だと思います。今度は「暮らしにおける看護」について学習していきます。1章B節、2章B節、C節、3章B節の③、C節、4章E・F・G節、5章C節、6章などと進めていくとよいでしょう。

●『地域・在宅看護論 2』を使った授業展開

——『系統看護学講座 地域・在宅看護論[2]地域・在宅看護の実践』(以下、『地域・在宅看護論 2』)を使って、どのような授業展開を考えられますか。

河原：『地域・在宅看護論 2』を使う授業は、専門職として看護を学ぶ段階になります。序章は、『地域・在宅看護論 1』と同じ斎田家の事例ですが、主人公の看護学生の視点だけでなく、介入するケアマネジャーの視点が盛り込まれており、専門職の思考を学ぶことができます。また、『地域・在宅看護論 1』の状況から変化がおこる場面が描かれており、暮らしとは変化の連続であること、大きな変化がおきたときに専門家の支えが必要になることなどが理解できる内容です。対象者の変化をとらえて対応するのが看護ですから、導入としてよい教材かと考えます。

——その後はどのような授業展開になるでしょうか。

河原：『地域・在宅看護論 2』の構成は、それぞれに「地域」の要素が加わっていますが、従来の「在宅看護論」と重なる部分が大きいです(図3)。これまでの「在宅看護論」の授業体系をふまえて、先生方が構築されるものと考えています。少し申し上げるとすれば、序章では対象者の変化をとらえて対応することの重要性が描かれていますが、変化を専門的な看護の視点で追う方法が1章で学ぶ看護過程になりますから、その辺りがつなげて理解できるとよいでしょう。

序章 地域・在宅看護の実践

- A 療養者と家族の思いから始まる看護
- B さまざまな人たちが力を合わせる看護
- C 長期的なかかわりが必要になる看護

第1章 地域・在宅看護の展開

- A 地域・在宅看護における看護過程
- B 地域・在宅看護過程の展開方法

第2章 暮らしを支える看護技術

- A 暮らしの場で看護をするための心構え
- B セルフケアを支える対話・コミュニケーション
- C 地域・在宅看護における家族を支える看護
- D 地域・在宅看護における安全をまもる看護
- E 地域における暮らしを支える看護実践

第3章 地域・在宅における時期別の看護

- A 健康な時期の看護
- B 外来受診期における看護
- C 入院時の看護
- D 在宅療養準備期(退院前)の看護
- E 在宅療養移行期の看護
- F 在宅療養安定期の看護
- G 急性増悪期の看護
- H 終末期の看護(グリーフケアを含む)
- I 在宅療養終了期の看護

第4章 地域・在宅看護の事例展開

- A 事例を学ぶにあたって
- B 医療的ケア児の事例展開

- C 脳卒中の療養者の事例展開
- D 慢性閉塞性肺疾患(COPD)の療養者の事例展開
- E 筋萎縮性側索硬化症(ALS)の療養者の事例展開
- F パーキンソン病の療養者の事例展開
- G 統合失調症の療養者の事例展開
- H 認知症高齢者の事例展開
- I がん終末期の療養者の事例展開

第5章 地域共生社会における多職種連携・多職種チームでの協働

- A 地域・在宅看護における多職種連携・多職種チームでの協働
- B 医療・福祉・介護関係者との連携・協働
- C 医療・福祉・介護関係者以外との連携・協働
- D 地域共生社会を実現するために

第6章 地域・在宅看護マネジメント

- A 地域・在宅看護マネジメントとは
- B 多様な場における地域・在宅看護マネジメント

第7章 地域・在宅看護活動の創造と展開例

- A 地域・在宅看護活動の創造
- B 「暮らしの保健室」の例
- C さまざまな地域・在宅看護活動の展開例
- D 地域・在宅看護活動の創造のための考え方

付章 資料編

- A 訪問看護実習の手引き
- B 参考資料

図3 『地域・在宅看護論2』目次

——『地域・在宅看護論2』では、看護過程の情報収集のなかで「療養者の居住地域の情報収集」の比重が大きくなりました。

河原：以前の『系統看護学講座 在宅看護論』にも含まれていましたが、より詳細になりました。地域・在宅看護における看護過程では、本人、家族、地域の3つの対象の変化をとらえて対応していきます。本人、家族、地域の3つの看護過程を並行して行っていると考えてもよいでしょう。また、それら3つは互いに関連し、影響し合っています。その全体像をとらえるのに重要になるのが『地域・在宅看護論1』で学んだシステム思考です(2章B節)。この辺りを盛り込んで授業を設計していただくと、『地域・在宅看護論1』『地域・在宅看護論2』をより効果的に使っていただけると考えています。

——『地域・在宅看護論 2』を使った授業の目標をどのように考えればよいでしょうか。

河原：7章では「暮らしの保健室」について大きな紙幅を割いて取り上げています。「暮らしの保健室」は、医療機関ではむずかしい地域における初期段階での予防や早期介入の役割を果たす画期的な資源です。訪問看護の実践を重ねるなかでニーズと対応するサービスがないことに気づいた秋山正子氏が創設しました。『地域・在宅看護論 2』を使った授業の目標は、実習に向けた看護過程や技術の習得もちろんですが、地域の潜在的なニーズに気づくこと、必要なサービスがあれば新たなシステムをつくることのできる看護師を育てることにあると考えます。

——ありがとうございました。